

51 鉄道敷設の光と影

～伝統窯志戸呂焼の盛衰～

1889（明治22）年、東海道線（東京―神戸間）が開通した。大井川以西のルートについては海岸沿いも候補にあがっていたが、誘致合戦の結果、現在の山間地ルートに決まったようである。これにより、江戸時代東海道の宿場として栄えた金谷（島田市）に鉄道が通ることとなり、新たな発展が期待されたのである。鉄道の魅力は、何といても物資を安全に大量輸送できる点にあるだろう。今まで港まで運ばれ、舟運を利用していた物が、鉄道によって大量に都市へ供給されるようになったのである。そしてこのことは、いやおうなしに地域の産業に大きな影響を及ぼすことになった。ここでは県内唯一の伝統窯である金谷の志戸呂焼の盛衰をとおり、鉄道敷設が県内の産業にどのような影響を与えたか、その一端をのぞいてみたい。

1 江戸まで運ばれた志戸呂焼

志戸呂焼とは、江戸時代初期から現在に至るまで金谷の横岡地域を中心に焼かれ続けている焼き物で、かつては主に日常雑器を生産し、茶器にも名品を残している。その始まりは、徳川家康が駿府の町で使用する雑器を焼かせるために、瀬戸地方の陶工集団を移住させたことにあるらしい。家康・秀忠・家光の三代にわたり徳川家に仕えた大名茶人の小堀遠州が、好みの窯（遠州七窯）のうちの一つに数えたことにより、その名を高めた。ことの真相はどうであれ、陶磁器愛好家にはよく知られた焼き物なのである。

さてこの志戸呂焼、江戸時代をとおり幕府や掛川藩の保護を受けながら生産を展開し、最盛期である18世紀～19世紀初頭には江戸にも製品を送り出していたことがわかっている。江戸の大名屋敷の跡から志戸呂焼の灯明皿や徳利（由右衛門徳利とよばれた）が出土しているのである。おそらく、榛原（牧之原市）にあった川崎湊から舟運を利用して江戸へ運ばれたものであろう。江戸には九州の伊万里や愛知県の瀬戸、岐阜県のみ濃製品が大量に供給されていたが、一部の器種においては江戸まで販路を得ていたわけで、繁栄ぶりをうかがい知ることができる。

この志戸呂焼も、明治維新を迎え衰退の一途をたどることになる。その主な原因は、江戸幕府や掛川藩の後ろ盾を失うことにあるが、鉄道の敷設もそれに追い打ちをかけることになったのである。

2 美濃高田製の貧乏徳利の躍進

古美術店や骨董店等で見かける物に貧乏徳利とよばれるものがある。主な産地は美濃の高田、京都丹波の立杭、九州有田の波佐見等である。江戸時代後期頃から都市における飲酒の風習の広まりとともに普及した物で、貸し徳利として酒屋が店名を記して庶民に貸し出したものである。志戸呂焼の由右衛門徳利も貧乏徳利の一種だったのである。この貧乏徳利、明治以降、東日本にはもっぱら美濃高田製の物が流通している。安価で大量生産できる体制を確立したのであろう。

3 由右衛門徳利と美濃高田製の貧乏徳利

写真は志戸呂焼の幕末期の由右衛門徳利〈写真1〉と美濃高田製の貧乏徳利〈写真2〉である。いずれにも『池田屋支店』という店名と、その反対側には『匳』という店のマークが記されている。これらは、池田屋支店という同一の酒店が窯場に注文して焼かせた徳利とみて間違いなからう。支店の所在地は不明だが、池田屋の本店は現在も横須賀（掛川市）で営業しており、安政の



〈写真1〉志戸呂焼の由右衛門徳利



〈写真2〉美濃高田製の貧乏徳利

大地震（1854年）があった時には操業していたとのことである。これらの資料から次のようなことが考えられる。

池田屋支店は、幕末頃までは地元の志戸呂焼の窯元に徳利を注文しており、窯元にとっても地元向けの徳利生産は重要な収入源であったと思われる。ところが明治時代のある時点から、池田屋支店はより安価な美濃高田製の貧乏徳利を注文するようになった。美濃高田製の製品がこの地方に大量に入ってくるとすれば、その要因は東海道線の敷設にあると考えられる。すでにこの時期窯場は一軒のみの状態であったが、いよいよその存続が危ぶまれることになったのである。かつて江戸にまで供給された志戸呂焼の徳利は、美濃高田製の徳利の流入によりその生産を終えたのではないだろうか。なお、志戸呂焼は窯元の努力により存続し、現在は数名の陶芸家たちによって意欲的な作陶活動が行われている。

以上、鉄道の敷設が地方の産業に与えた影響について、志戸呂焼の盛衰をとおして窯業からその一端を見た。光の部分のみならず、影の部分にも注目していきたいものである。

〈参考文献〉

『金谷町史』通史編 別編 志戸呂窯業史 第4章 他
『図説 金谷町史』近世の金谷9 他
『とっくりのがんばり』（紀伊国屋書店）